越前坂井市の石造多層塔

古川　登

一・はじめに

越前地方において、石造多層塔は鎌倉時代中期に現れ、後期後半から末にかけて爆発的に造営される。そして、南北朝以後その造営は減少し、江戸時代前期に一時的に造営が盛んになることが明らかとなっている。

古川は、村上雅紀氏と共同で「越前地方における石造多層塔の研究」という小論を纏めたことがある。この論文は、越前地方における石造多層塔を総論的に検討したもので、個々の石造多層塔を報告することを目的としたものではなかった。また、この論文が片山鳥越墳墓群・方山真光寺跡塔址という遺跡の発掘調査報告書に掲載されたものであったため、一部の研究者の目にしかとまらないという批判もあった。

小稿は、こうした点を踏まえ、坂井市で調査した石造多層塔の事実報告を中心に行うこととしたい。

二・若干の用語について

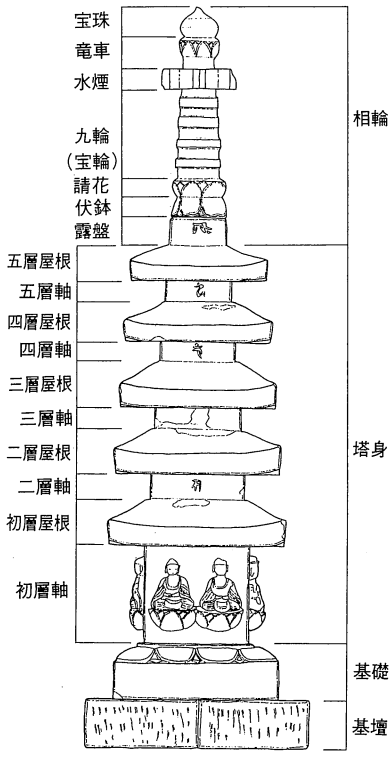
本論に入るに先立って、若干の用語について解説しておくこととしたい。

「石造塔」石造塔とは、多層塔や五輪塔だけでなく、板碑他を含む概念として用いる。

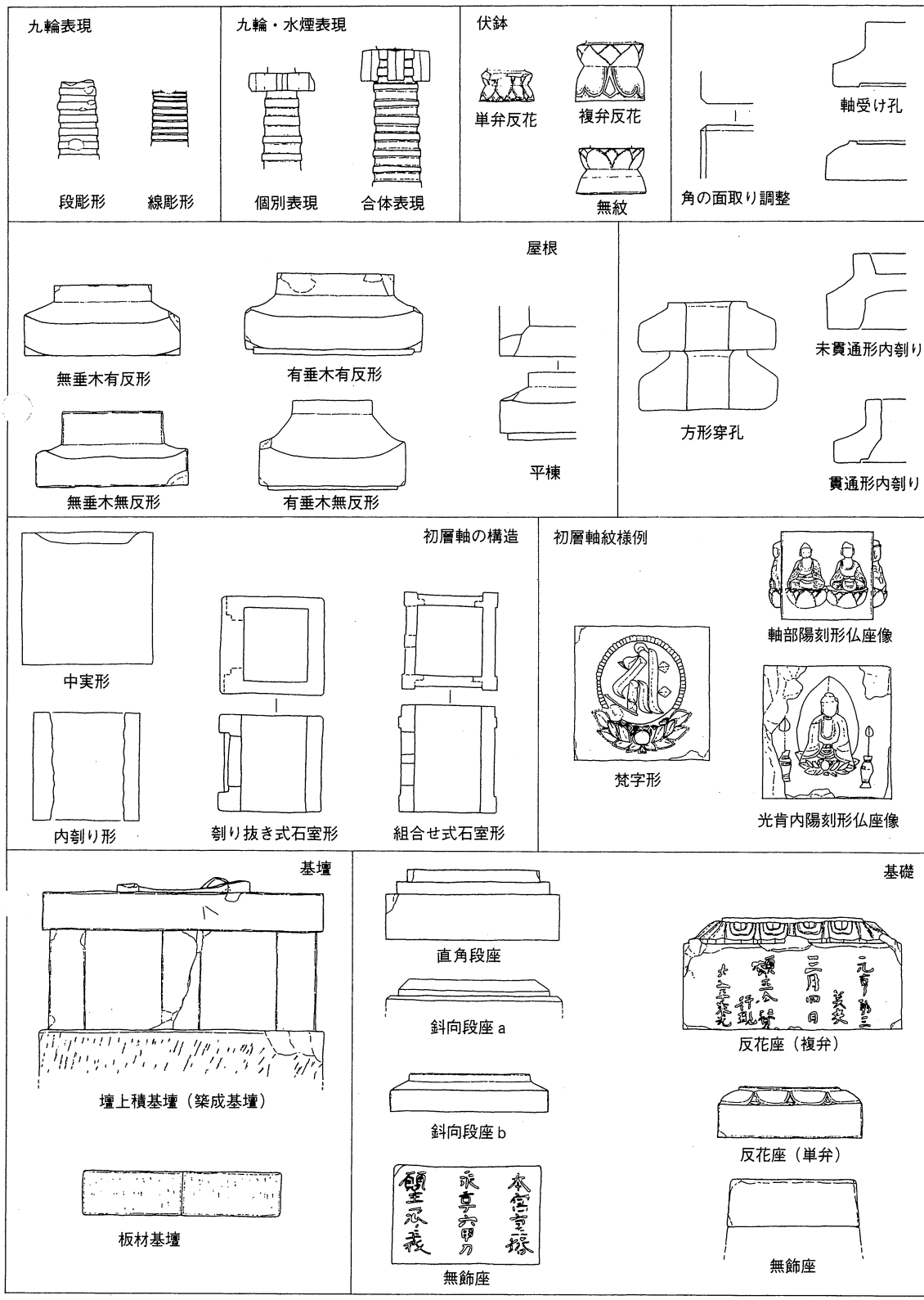
「塔身装飾」塔身装飾は、基本的には塔身に刻まれた装飾を言い、月輪・蓮華座・梵字・仏像などの紋様によって構成される。加えて、この塔身装飾は多層塔や宝篋印塔の塔身、五輪塔水輪などのいわゆる塔身部のみに施されるものではなく、宝篋印塔の隅飾、五輪塔地・火・空風輪、板碑他にもみられるものである。このことにおいて、石造塔を仏教的に意味付ける装飾という概念としての「塔身装飾」を定義する。

梵字・月輪・蓮華座の組み合わせは塔身装飾の一例であり、蓮華座上に配された陽刻の圏線式月輪の周囲に小花弁を配する越前式荘厳・越前式装飾、あるいは越前式文様と過去に呼ばれた装飾は、このことにおいて越前式塔身装飾と呼ぶこととなる。

「蓮華紋」蓮華文は、平面・立体を問わず瓦当の蓮華紋の呼称を参考とし、以下のように用いる。連弁が上方を向いているものを請花、下方を向いているものを反花と呼称する。そして、連弁の単位が一弁のものを単弁、二弁のものを複弁と呼び、蓮弁間の小弁を間弁と呼称するが、間弁を欠くものもある。



石造多層塔各部の名称



石造多層塔の各部材分類

次いで、弁上に子葉ないし小形の弁を重ねるものを重弁と呼称し、それを欠くものを素弁と呼称する。したがって重弁単弁、素弁単弁と呼称することとなる。なお、連弁の周囲を輪郭線で画して縁取りをしたものは重弁の影響下に成立したものとみられるが、子葉を持つ重弁に後出することから、ここでは重弁に含めず過去に分類したままに加飾請花としておきたい。

「梵字」梵字は言を要するまでもなく文字であるが、ここでは塔身装飾を構成する一要素＝紋様と認識する。まず、装飾性の全くない通常の梵字を「普通梵字」と呼び、梵字の字画の周囲に線をめぐらせて輪郭を際立たせた梵字を「加飾梵字」と呼ぶこととする。多層塔各部位の呼称、塔身装飾各部位の呼称は図示したとおりである。

塔身装飾各部の名称

なお、紀年銘を欠く石造多層塔については塔身装飾の梵字の字画の型式変化を基にした梵字編年、古川・村上二〇〇四「越前地方における石造多層塔の研究」Ⅳ紋様による編年一四〇～一五二項によって位置づけることを断っておく。

三．坂井市の石造多層塔

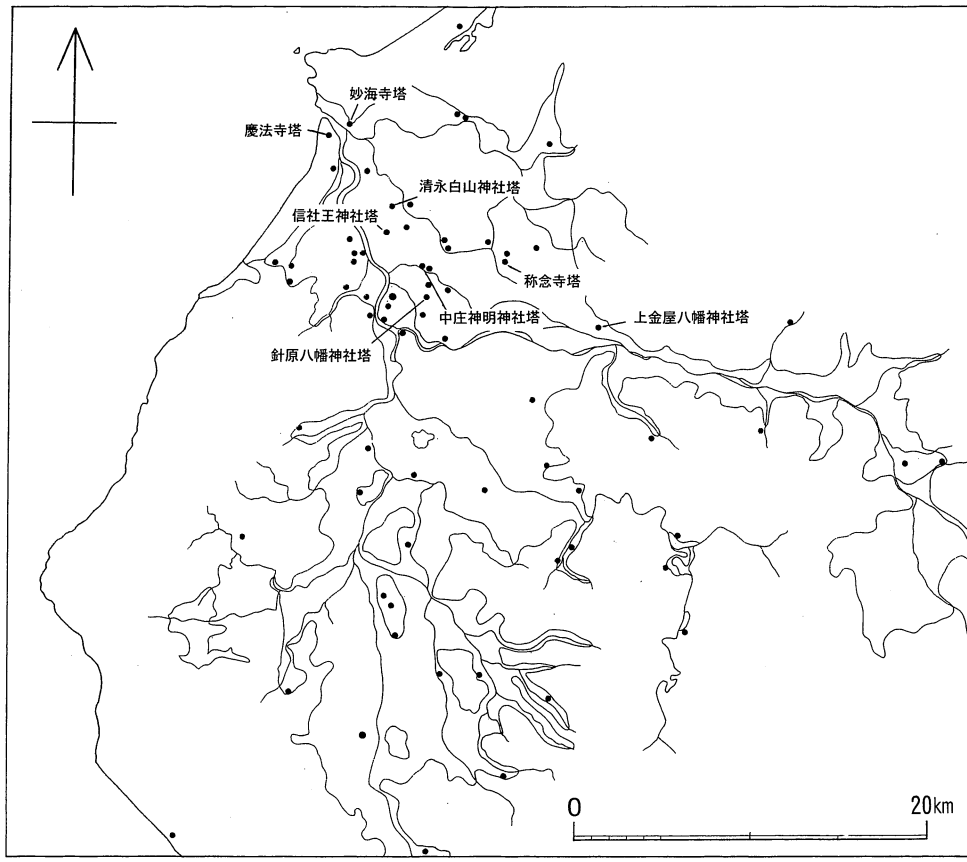
敦賀を除く越前地方における石造多層塔は残欠を含めて約八七基あり、坂井市にはそのうち二三基が分布している。筆者は二〇〇三年の九月から二〇〇四年の一月にかけて管理者の承諾を得た上で越前地方に存在する石造多層塔三〇基他の実測調査を実施した。この中で坂井市において調査を実施した石造多層塔は丸岡町の上金屋八幡神社塔・称念寺塔、坂井町の清永白山神社塔、春江町の針原八幡神社塔・中庄神明神社塔・信社王神社塔、三国町の慶法寺塔・妙海寺塔の八基である。以下、坂井市の主要石造多層塔八基について報告することとしよう。

上金屋八幡神社塔（坂井市丸岡町上金屋）

上金屋八幡神社塔は、上金屋の八幡神社本殿の右脇に所在する。石材は緑色凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。石質は緻密で、良質である。

現在は基礎と塔身が残存するだけで屋根材・相輪は全く認められないが、上田三平氏の「主[四]要金石年表」に「大永三年十二月二日・多重石塔・坂井郡鳴鹿村金屋八幡宮」と記されていることから多層塔とみてよい。

問題は、越前地方の中世石造多層塔の大半を占める越[一]前式石造多層塔の基礎に宝篋印塔の基礎に共通する段形が認められることで、このため屋根材を欠くと宝篋印塔であるのか多層塔であるのかを判別することが困難なことである。よって、このことにおいて本塔を多層塔と特定することは出来ないという批判もあり得る。それは正論ではあるが、段形を持つ基礎だけが遺存した場合、宝篋印塔とみなされるのが一般的であることを失念した見



石造多層塔の分布

解である。このことを失念することがなければ、上田氏が本塔を実見した際には多層塔と認識することができる姿をとどめていたことを指摘することは出来よう。したがって、多層塔ではないと批判するむきがあるとすれば、上田氏が宝篋印塔と書き記さなかった理由、これをまず証明する必要がある。

基礎は無紋で、宝篋印塔に共通する二段の段形を有する。正面の幅〇・五八五米、高さ〇・二二六〇米を測る。

塔身は、正面の幅と高さとも〇・三六五米を測り、枘を加えた高さ〇・三九〇米を測る。枘は円形で直形〇・一二五米・高さ〇・一〇四米を測る。

塔身装飾は、越前式塔身装飾による阿弥陀三尊である。正面には阿弥陀如来を表す梵字キリーク、右面には聖観世音菩薩を表す梵字サ、左面には勢至菩薩を表す梵字サクが彫られている。正面は素弁単弁の二段形請花の蓮華座上に置かれた小花弁を配した陽刻の圏線式月輪内に梵字が彫られている。小花弁は、請花と接する部分には配されていない。右面と左面は、素弁単弁反花の蓮華座上に置かれ

た陽刻の圏線式月輪の周囲に小花弁を配した月輪内に梵字が彫られている。小花弁は月輪の周囲を全周する。

塔身の背面中央に縦に一行、□永三年十二月二日と紀年銘が彫られている。

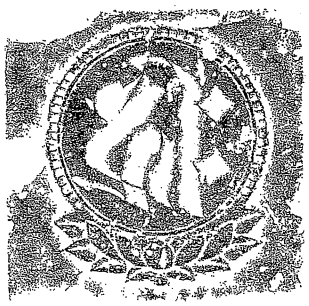
本塔の製作年代については、塔身背面に彫られた紀年銘から特定することが出来る。上田三平氏[四]・三井紀生氏[五]は大永三年（一五二三）と判読され、室町時代の製作と考えられている。しかし、その塔身装飾の様式を検討すると、大永年間という室町時代の製作であるという銘文の判読には疑念を抱かざるを得ない。

そこで「大」と判読されている文字を観察すると、大と判読された文字の字画がX字状を呈して不自然である。そして、それが大であるならば、第一画に欠損部がないのに第二・三画の始点で止まって右にのびていないのである。

上金屋八幡神社塔
紀年銘

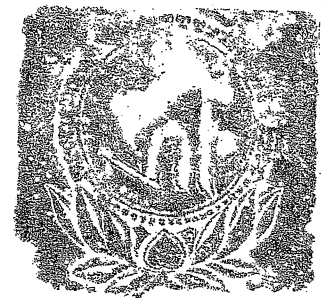
次いで、その文字をさらに観察すると文字の上部が欠損し、その欠損部分に横にのびる字画の残画の存在を認めることが出来る。X字状を呈する二画からなる字画の上部にあるので、それが冠の残画であることを理解することが出来る。X字状を呈する脚と冠からなる文字で永と組み合わさって二文字からなる中世の年号を検索すると、「文永」を候補としてあげられる。そこで改めてその文字の冠の残画を観察すると、その冠が水平でウ冠ないし平冠、あるいは草冠のように下にのびる字画のない冠であることがわかり、鍋蓋とみて誤りない。したがって、本塔の紀年銘の最上部の文字は「文」であり、その年号は大永ではなく文永と判読することが出来ることとなる。

次いで、塔身装飾の様式は大永三年（一五二三）であれば天文十□年銘（一五三〇年代）の福井市城戸ノ内町の一乗谷塔、永禄四年銘（一五六一）の越前市京町の引接寺塔[六]と塔身装飾が近似すると考えられるのであるが、この三者の塔身装飾を比較すれば、その様式が近似しないことを認識するだろう。しかし、



上金屋八幡神社塔

一乗谷塔



引接寺塔

塔身装飾の比較

なお大永という判読になお拘泥するむきがあるとすれば、文永十一年（一二七四）銘の坂井市春江町井向白山神社板碑の塔身装飾と比較すればよい。一乗谷塔と異なって、それが近似することを認識することとなる。

さて、文永三年（一二六六）という紀年銘は、坂井市春江町井向白山神社板碑の紀年銘、文永十一年（一二七四）を遡って北陸地方で最も古い紀年銘を持つ石造物であることを指摘することが出来る。一二六〇年代の笏谷石製石造塔は越前全域でも数基しか知られないが、この段階は笏谷石製石造塔における塔身装飾の様式が完成し、この段階以後は一三五〇年代に加飾請花が現れるまで模倣と退化、その形式化が進行している。上金屋八幡神社塔は、笏谷石製石造塔の塔身装飾の成立、その様式論的研究の鍵となる資料である。この意味で、坂井市だけでなく、北陸地方の石造塔の成立を考える上で極めて重要な資料であると言える。

なお、個人的な見解ではあるが、本塔の塔身装飾は坂井市で実見した石造塔の中で最も優美で、その美しさには溜息をつかずにはいられないだろう。しかし、このような石造塔でありながら、「指定」という最低限の保護対策さえもなされていないことに問題を感じる。保護対策機関のこれからの「文化財保護行政」を注視したい。

称念寺塔（坂井市丸岡町長崎）、坂井市指定文化財・建造物「石造称念寺七重塔」昭五六年七月二日指定。

称念寺塔は、延元三（一三三八）年七月二日に燈明寺畷において討ち死にした新田義貞公墓所（福井県指定史跡・昭和三四年九月一日指定）のあることで著名な長林山称念寺の庫裏庭園に所在する。石材は緑色凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。

本塔は壇上積基壇上に立つ多層塔で、現在は七重塔であるが、五層目と六層目の間に低減率の異状が認められ、ここに一つ屋根材が入ることは疑いない。また、本塔後背の築山中に基壇の部材と一面に蓮華紋を有する屋根材が放置されているので、本塔の本来の姿が九重塔であったことがわかる。実測図は、失われた六層目を除いて復元的に図示している。

本塔は、一九四八年六月二八日の午後四時一三分二九秒に発生した福井地震に罹災して倒壊し、震災の後数年を要して再建することが出来たという。その再建に際して、破損した本来の六層目を除去し、さらに層数を調整するために本来の九層目を除去して七重塔として再建したことが推察される。基壇もこれと同じ理由で本来の規模より小さくなったものであろう。基壇から相輪までの復元による残存高三・五三米を測る。

基壇は壇上積基壇で、基壇上には葛石上に削り出された花立と香炉がある。基壇の現在の規模は、地覆の幅で一・〇八米・束石の幅で一・〇一米・葛石の幅で一・〇六米・基壇の高さ〇・六九米を測る。

基礎は、反花座で反花は素弁複弁である。基礎の幅〇・七六米、高さ〇・二五米を測る。

塔身は、幅〇・四二米、高さ〇・四三米を測る。塔身装飾は舟形光背内陽刻式仏座像で、阿弥陀三尊を表している。三尊とも印は定印を結んでおり、形式化した像容となっている。塔身正面の右側に右躰不二任一房位、左

側に観喜院殿僧阿弥陀佛。塔身右面左側に寛永十六己卯歳／十月上八天白。左面右側に逆修藤原朝臣戸祭兵太夫宗久と彫られている。なお、正面の阿弥陀仏の弥の字は異体字、右面の歳の字は略字である。

本塔の各部材には角の面取り調整が施される。屋根材は無垂木無反形で、上層の軸部と伴に作り出された一体形で貫通形内刳りが施され、その下部には下の層の軸部を受ける軸受孔がある。

なお、本来の九層目の屋根材の上部は、正面を意識したとみられる面に蓮華紋を施していることから相輪の露盤とみることが出来る。露盤以外の相輪は、伏鉢～宝珠が一体で作り出されているはずであるが、伏鉢・請花と九輪、九輪と合体表現された板状水煙の下端部が残存し、宝珠・竜車と水煙の大半は折損して失われている。伏鉢は素弁複弁の反花、請花は素弁単弁の請花、九輪は線彫形である。

本塔の製作時期は、塔身にある紀年銘のとおり、江戸時代の寛永十六年（一六三九）の製作とみて様式的に誤りない。

清永白山神社塔（坂井市坂井町清永）、坂井市指定文化財・建造物「清永白山神社石造九層塔」平成一九年四月二六日指定。

清永白山神社塔は、清永白山神社の一隅に所在する。塔身に「白山」と刻まれ、それが白山神社境内にあるということに、当初の造立位置を大きく動いていないと考えられる。

本塔は九重塔で、後補とみられる基壇を除いた基礎から相輪までの残存高三・二二〇米を測る。石材は緑色凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。基壇は、切石の板材を用いた板材基壇であるが、上面に基壇とかかわりのない枘穴のあること、調整の異なる板材三枚を組み合わせて用いていること、使用石材が多層塔本体とやや異なることから後補されたものと考えられる。

基礎は、宝篋印塔に共通する二段の段形をもち、幅〇・七〇米・高さ〇・二八米を測る。

塔身は幅〇・四三米・高さ〇・四一五米を測る。現在の正面である西面に軸部陽刻式の仏坐像が彫られているが、剥落が著しく如来坐像であることしかわからない。北面に胎蔵界大日如来を表す梵字のアーンク、東面に金剛界大日如来を表す梵字のバーンクが彫られている。南面の右端に天文十八年八月、中央に大きく白山と彫られ、左端に願主藤秦兵衛尉と彫られている。なお、三井紀生氏は紀年名を天文六年（一五三七）と判読されているが、[七] 文字の大きさと配分を検討すれば、それが誤読であることは明らかである。

九層の屋根は無垂木無反形で、上層の軸部と伴に作り出された一体形である。低減率と石材に異常が認められないことから、全て造立当初のものと考えられる。

九層目の屋根材の上部は相輪の伏鉢の径と合致していることから、九層目の屋根材の上部を相輪の露盤とみることが出来る。露盤以外の相輪は、伏鉢～宝珠が一体で作り出されているはずであるが、伏鉢・請花・九輪六輪が残存し、宝珠・竜車・水煙は折損して失われている。伏鉢は無紋、請花は素弁単弁の請花、九輪は段彫形である。請花の蓮華紋は、間弁が主間弁と副間弁ニ葉の三葉からなる三葉間弁の一類型と考える。

三葉間弁は、吉田郡永平寺町[八]志比磨崖仏群中の永正一四年（一五一七）銘地蔵菩薩坐像、

福井市片山新光寺八幡神社の天文二年（一五三三）銘石灯篭、丹生郡越前町小倉仏性寺の弘治三年（一五五七）銘石造多宝塔が知られ、全て朝倉氏治下の紀年銘を持つ石造物である。このことから相輪も造立当初のものが遺存しているとみてよい。

なお、本塔の各部材には角の面取り調整が認められ、石造多層塔でこの調整が認められるものとして最も古い例である。

本塔の現在の正面は如来坐像の刻まれた西面で注連縄が張られ、参道も整備されている。しかし、南面の銘文が一六世紀代の五輪塔地輪の正面と同様であることによって、この面を正面とみることが出来る。銘文に梵字と神の名、願主と法名という違いは認められるが、それは否定的なものとはならない。また、現在の南面が正面であれば、清永白山神社の本殿が南面していることとも一致する。正面が南面するのは、白山神が本地垂迹説によるものであるので、白山神に捧げられた石造多層塔であるから寺院建築と同様に南面させられたものと考えられよう。そして、正面が南面する理由が寺院建築との関係においてであるならば、正面が南以外に向く可能性は考慮しなくともよい。

次いで西面に刻まれている如来坐像については、正面が先述した銘文を持つ南面で、この面が南以外を向くことを考えなくともよいなら、西面する如来坐像は西面することから阿弥陀如来である可能性が極めて高いことを指摘することが出来る。

本塔の製作時期は、塔身にある紀年名から朝倉氏治下の天文一八年（一五二三）の製作とみて誤りない。

信社王神社塔（坂井市春江町下小森）、坂井市指定文化財・建造物「石造六重層塔」平成六年一〇月二一日指定。

信社王神社塔は、信社王神社の一隅に所在している。鎌倉時代の石造多層塔として、基壇から相輪まで遺存する希有な例である。現在の姿は六層の塔で、現在の高さ二、二四米を測る。石材は緑色凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。

基壇は切石の板材基壇で、幅〇・六六米、高さ〇・一〇米を測る。基礎は、宝篋印塔に共通する二段の段形をもち、幅〇・五三米、高さ〇・二八米を測る。塔身は幅〇・三三米・高さ〇・三三米を測る。

塔身装飾は、越前式塔身装飾で阿弥陀三尊を表す梵字が彫られている。正面には阿弥陀如来を表す梵字キリーク、右面には聖観世音菩薩を表す梵字サ、左面には勢至菩薩を表す梵字サクが彫られている。塔身装飾は、素弁単弁の二段形請花の蓮華座上に置かれた小花弁を配した陽刻の圏線式月輪内に梵字が彫られている。小花弁は、請花と接する部分には配されていない。

屋根材は無垂木有反形で、上層の軸部と伴に作り出された一体形である。現在の三層目と四層目、四層目と五層目、五層目と六層目の間に低減率の異状が認められ、ここにそれぞれ屋根材各一層の入ることが明らかである。したがって本塔の本来の姿は九重塔であったとみてよい。

相輪の露盤は通常は最上層の屋根材上に作り出されているが、本塔では認められない。露盤以外の相輪は、伏鉢～宝珠が一体で作り出されているはずであるが、伏鉢・請花と九

輪が九輪残存し、宝珠・竜車・水煙は折損して失われている。伏鉢は無紋、請花は素弁単弁の請花、九輪は線彫形である。なお、残存する九輪に水煙の認められないことによって、水煙が九輪と合体表現されたものでないこと、すなわち個別表現されたものであったことがわかる。

本塔の製作時期は梵字編年のⅡ形式2段階後半期の特徴を有していることから一二九〇年代に製作されたものと考えうる。

針原八幡神社塔（坂井市春江町針原）、坂井市指定文化財・建造物「石造六重層塔」平成六年一〇月二一日指定。

針原八幡神社塔は、針原八幡神社の一隅に所在する。現在の姿は六層の塔であるが、六層目には五輪塔の火輪が載せられている。六層目の火輪を除いた現在の高さは一・八六米を測る。石材は緑色凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。

基礎は、宝篋印塔に共通する二段の段形をもち、幅〇・六七米を測る。高さは基礎の下部がコンクリートで固められているためその全高を計測することが出来ないが、現況での高さ〇・三〇米を測る。塔身は幅〇・四一米・高さ〇・四一米を測る。

塔身装飾は四方仏で、仏座像と越前式塔身装飾が施されている。現在の正面である西面に舟形光背内陽刻式の仏坐像が刻まれ、右面には聖観世音菩薩を表す梵字サ、左面には勢至菩薩を表す梵字サク、背面には金剛界大日如来を表す梵字のバンが彫られている。

越前式塔身装飾は、素弁単弁請花の蓮華座上に置かれた陽刻の圏線式月輪の周囲に小花弁を配した月輪内に梵字が彫られている。小花弁は、請花と接する部分には配されていない。

本塔の四方仏は梵字だけでもサ・サク・バンという通常の四方仏とは異なった変則的なものである。仏坐像についてはかろうじて観察される印の形が定印であることと、右面の梵字がサで左面の梵字がサクであることから阿弥陀如来である可能性を考える。そのように考えられるなら、この四方仏は阿弥陀三尊に金剛界大日如来を加えたことで成立した四方仏であったか、あるいは阿弥陀如来側からみれば阿弥陀三尊、大日如来側からみれば金剛界大日如来三尊となる変則的なものであった可能性も考えうるかもしれない。

屋根材は有垂木無反形で、上層の軸部と伴に作り出された一体形である。初層の屋根材と二層目の屋根材の棟は面取りが施された平棟となっている。二層目と三層目の間に低減率の異状が認められ、ここに屋根材一層が入ると考えられる。次いで四層目と五層目の間には大きな低減率の異状が認められ、ここには二ないし三層の屋根材が入ると考えられる。現在の五層目の上面はコンクリートによって火輪が接合されているため確認することが出来ないが相輪を受ける枘孔が確認されなければ、この上に枘孔を持つ屋根材が存在したこととなる。こうしたことから確定にはいたらないが本塔の当初の姿は九重塔であった可能性が高い。相輪については失われ、破片さえ残っていない。

本塔の製作時期は梵字編年のⅡ形式1段階後半期の特徴を有していることから一二七〇年代に製作されたものと考えうる。

中庄神明神社塔（坂井市春江町中庄）、坂井市指定文化財・有形民俗「十三重石塔」平成一八年三月三日指定。

中庄神明神社塔は、現在は中庄神明神社の一隅に置かれているが、過去の河川工事によって近傍から出土したものであるという。本塔は基礎・塔身・屋根材二層が残存するにすぎないのに、不思議なことに十三重石塔として指定されている。ただ、その指定が建造物ではなく有形民俗という民俗資料としての指定であることに、十三重石塔としての指定が伝承に基づくものであることを示している。

基礎・塔身・屋根材二層からなる現在の高さは一・一八米を測る。石材は緑色凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。石質は緻密で、良質である。

基礎は、通常の越前式石造多層塔のように宝篋印塔と共通する二段の段形ではなく、一段の段形を持つ変則的な基礎であり、本塔の他に例は知られていない。基礎の幅〇・六七米、高さ〇・二八米を測る。塔身は幅〇・四九米・高さ〇・五〇米を測る。

塔身装飾は四方仏で、仏座像と越前式塔身装飾が施されている。舟形光背内仏座像を正面とすると右面には阿閦如来を表す梵字ウーン、左面には阿弥陀如来を表す梵字キリーク、背面には不空成就如来を表す梵字アクが彫られている。越前式塔身装飾は、素弁単弁の二段形請花の蓮華座上に置かれた小花弁を配した陽刻の圏線式月輪内に梵字が彫られている。小花弁は、請花と接する部分には配されていない。

舟形光背内仏座像は花瓶に一茎蓮を挿したものが仏座像の左右に配されている。仏座像は梵字の配置が右面ウーン（阿閦如来）、左面キリーク（阿弥陀如来）、背面アク（不空成就如来）という配置から金剛界四仏であることがわかるので、タラーク（宝生如来）の位置にあることがわかる。しかし、その印は定印であるので、宝生如来とすることに疑念の生じることは止める術がない。しかし、金剛界四仏でキリークが彫られている以上、この仏座像を阿弥陀如来とみることは困難である。

あるいは、梵字の阿弥陀如来と仏座像の阿弥陀如来からなる変則的な四方仏とみる理解もありうるかと思われるが、仏座像の他は金剛界四仏であるので、かかる変則的な理解の成立する可能性は低い。よって、本塔の仏座像は金剛界四仏の配置から、タラーク（宝生如来）以外の可能性は生じないと言える。

ところで、四方仏を持つ石造塔は大日如来を表すものであるので、四方仏に正面があることはない。本塔の場合、仏座像のある面が正面として意識されていたかと思われるのであるが、四面を観察すると、ウーンの面が他の面に較べて鑿痕を残していない、調整が丁寧であることを指摘することが出来る。このことにおいて、ウーンの面が見かけの正面として製作された面であったと言いうる。

屋根材は、無垂木無反形で、上層の軸部と伴に作り出された一体形である。屋根材の中央には〇・一六五米四方の方形穿孔が穿たれるが、この穿孔は穿孔内面が丁寧に研磨され、鑿などの工具痕を残さないことから、通常の重量軽減のための内刳りと異なっている。

なお、本塔は十三重石塔として指定されているが、本塔が十三重塔であったという根拠は全く存在しない。また、残存する二層の屋

根材を十三重塔の根拠とするとすれば、それは論理の飛躍を超えた空想でしかない。

越前地方の鎌倉時代の石造多層塔の大半は九重塔で、本稿で取り上げた信社王神社塔、針原八幡神社塔、慶法寺塔も九層の塔である可能性が高い。また、室町時代の清永白山神社塔、江戸時代の称念寺塔も九重塔である。このことは、越前地方で中世から近世にかけて九重塔を建てることが流行していたことをうかがえるものかもしれない。これに加えて、越前地方で中世の十三重塔が全く確認されていない現状にあっては、本塔が十三重塔であったかどうかを云々することは、研究者であれば慎重にして避けるべきことである。

本塔の製作時期は、梵字編年のⅡ形式2段階後半期の特徴を有していることから一二九〇年代に製作されたものと考えうる。それよりも古いとみるむきもあるようであるが、型式論の上からは問題以前である。

慶法寺塔（坂井市三国町新保）

慶法寺塔は、新保の墓地の一隅に所在し、現在は基礎よりも小さな台石上に載せられている。台石を除いた現在の高さは一・二三米を測る。石材は緑色凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。

基礎は、宝篋印塔に共通する二段の段形をもち、幅〇・六九五米・高さ〇・二七米を測る。なお、基礎の下部には角の面取り調整が施されているが、他の部材には全く施されておらず、現在の場所に移築するに当たって、基礎よりも小さな台石上に本塔を載せるに先立って施された調整と考えられる。塔身は幅〇・五〇米・高さ〇・四六米を測る。

塔身装飾は四方仏で、仏座像と越前式塔身装飾が施されている。現在の正面である北面に舟形光背内陽刻式の仏坐像が刻まれ、右面に宝生如来を表す梵字タラーク、左面に釈迦如来を表す梵字バク、背面に金剛界大日如来を表す梵字バンが彫られている。

越前式塔身装飾は、素弁単弁の二段形請花の蓮華座上に置かれた小花弁を配した陽刻の圏線式月輪内に梵字が彫られている。小花弁は、請花と接する部分には配されていない。

仏座像は、梵字の配置が右面にタラーク、左面にバク、背面にバンという変則的な配置であるが、これと同様な配置の四方仏は福井市岸水白山神社1号塔身の正面キリーク・右面タラーン・背面アがある。背面がバンであるのかアであるのかという違いはあるが、これを参考とすればタラークとバクとの間の仏座像がキリークこと阿弥陀如来であることをうかがうことは来る。

屋根は無垂木有反形で、上層の軸部と伴に作り出された一体形である。現在の初層の屋根材に「慶法寺」と彫られている。本塔の現在の姿は七重塔であるが、初層の屋根材と二層目の屋根材の大きさに差が認められないことから、他の層の屋根材より大きく造られる本来の初層の屋根材が失われていることがわかる。また、二層目と三層目の間に低減率の異状が認められ、ここにも屋根材が一つ入ることは疑いない。このことから本塔の当初の姿が九重塔であったことを指摘することは出来る。相輪は失われ、破片さえ認められない。

本塔の製作時期は、梵字編年のⅡ形式1段階後半期の特徴を有していることから鎌倉時代後期の一二七〇年代に製作されたものと考えうる。本塔は三国町域において、最も古い

石造多層塔で、ほぼ当初の姿をとどめているものとしては坂井市域で最古の石造多層塔である。

問題は、日本海からの強い海風のためか風化が著しく、塔身は剥落が進行して細かな亀裂と剥離が無数に認められる。このままの状況で放置すれば、そう遠くないうちに梵字の大半が判読不能となるものと思われる。これの保存の声をあげることは研究者としての責務であるので、関係各位に連絡を取ったが、今日も何ら対策がとられることはなく、風化の進行は止まってはいない。石造多層塔を研究する者として、ただ傍観を求められる言の葉の冷たさに、自らの無力さを思い知らされている。

妙海寺塔（坂井市三国町山王）

妙海寺塔は妙海寺の墓地に所在し、現在は総墓として用いられている。本塔は五重塔で基壇から相輪までの高さ五・二〇米を測り、現存するものの中で越前地方最大の石造多層塔である。石材は緑色凝灰岩で、いわゆる笏谷石である。

基壇は二段からなる切石積み基壇で、下段の幅一・五一米、上段の幅一・三六米、高さ〇・六三米を測る。基礎は反花座で、反花は素弁単弁である。基礎の幅一・二三米・高さ〇・二八五米を測る。

塔身は組み合わせ式で、柱・頭貫・地長押が表現されている。幅は地長押で〇・七四米、高さ〇・七四五米を測る。正面中央に笠塔婆が線彫りされた柱があり、笠塔婆内に「南無妙法蓮華経法喜禪定門」と彫られている。塔身左面に「奉造立寶塔意趣者／為法喜禪定門菩提也／干時萬治二巳亥年／卯月五日／施主／平野屋徳左衛門」と彫られている。

塔身内、その奥壁には笠塔婆形の浮彫を挟んで二体の如来座像が彫られた石材が納められている。笠塔婆の浮彫には「南無妙法蓮華経」と彫られている。如来座像は、左右とも同形同大で冠・衣紋も変わらず、共に合掌印を結ぶ形式的な像容である。塔身左面の銘文に寶塔とあること、笠塔婆に南無妙法蓮華経と彫られていることから印はともかくとして、釈迦如来と多宝如来を表しているとみられる。

本塔の各部材には角の面取り調整が施される。屋根材は無垂木無反形で、上層の軸部と伴に作り出された一体形で貫通形内刳りが施され、その下部には下の層の軸部を受ける軸受孔がある。

なお、五層目の屋根材の上部の露盤から二層目の軸にかけて妙法蓮華経と大きく彫られ、各文字を赤彩している。

露盤以外の相輪は枘を除いて一・三二米あり、二石で造られている。相輪は九輪の四輪目で分割され、その二つの部材は鉄芯によって接合されているとみられる。伏鉢は素弁複弁の反花、請花は素弁単弁の請花、九輪は段彫形であるが七輪しかない。水煙は九輪と合体表現された角柱状をする水煙である。竜車・宝珠は無紋である。

本塔の製作時期は、塔身にある紀年銘のとおり江戸時代の万治二年（一六五九）の製作とみて様式的にも誤りない。

四・まとめ

まず、ここに報告した坂井市における八基の石造多層塔を製作時期別に分けると、丸岡

町上金屋八幡神社塔、春江町針原八幡神社塔・中庄神明神社塔・信社王神社塔、三国町慶法寺塔の五基が鎌倉時代の一三世紀に製作されたもので、坂井町清永白山神社塔が室町時代、朝倉氏治下の一六世紀の製作、丸岡町称念寺塔、三国町妙海寺塔の二基が江戸時代一七世紀の製作である。

越前地方において製作時期の判明している石造多層塔の時期別分布は、一三世紀三一基、一四世紀一〇基、一五世紀三基、一六世紀五基、一七世紀一三基であり、坂井市において調査を実施した八基の石造多層塔の製作時期別分布と大きく変わらない。

上金屋八幡神社塔、信社王神社塔は梵字による阿弥陀三尊。春江町針原八幡神社塔は阿弥陀如来を表した仏座像と梵字サ・サク・バンという変則的な四方仏。慶法寺塔は、阿弥陀如来を表した仏座像と梵字タラーク・バク・バンという変則的な四方仏。中庄神明神社塔は金剛界四仏で宝生如来を仏座像として表し、その他を梵字で表している。

坂井市における鎌倉時代の石造多層塔は、中庄神明神社塔を除けば浄土信仰を読み取ることが出来る。しかし、上金屋八幡神社塔に紀年銘が認められるだけで願文が認められないため、造塔の理由がわかるものはない。越前全体でも鎌倉時代の石造多層塔に願文が記されているのは二基に過ぎない。福井市高尾神社塔は「爲慈父幽霊成佛也」、天池日吉神社塔は「爲我母十三年相當」とあり、いずれも子が亡き父母のために建てたものである。

室町時代の清永白山神社塔は、藤秦兵衛尉によって白山神に奉納されたことがわかる石造多層塔である。

江戸時代の称念寺塔は、藤原朝臣戸祭兵太夫宗久によって観喜院殿僧阿弥陀佛という法名を持つ人物のために建てられたもので、逆修とあるところから仏教における作善として建てられたものであったことがわかる。

妙海寺塔は塔身正面の柱内の笠塔婆に「南無妙法蓮華経法喜禪定門」と彫り、塔身左面に「奉造立寶塔意趣者／為法喜禪定門菩提也／干時萬治二巳亥年／卯月五日／施主／平野屋徳左衛門」と彫られており、平野屋徳左衛門が法喜禪定門という法名の人物の菩提を弔うために建てた供養塔であることがわかる。

しかし、こちらには称念寺塔とは異なって願主の作善を窺わせる文言は無い。このことについては称念寺の時宗、妙海寺の法華宗という違いが銘文の構成に反映されている可能性も考えられるが、今後の検討課題としたい。

五・付記

本稿で報告した坂井市の石造多層塔は、石造多層塔の研究を執筆するため村上雅紀氏の協力を得て実施した。調査にあたっては国京克巳氏、丸岡町上金屋区・称念寺、坂井町清永区・清永白山神社、春江町針原区・下小森区・中庄区、妙海寺・慶法寺、丸岡町教育委員会、坂井町教育委員会、春江町教育委員会、三国町教育委員会の理解とご助力をいただいた。また、銘文の判読に当たっては福井県立朝倉氏遺跡資料館の佐藤圭氏にご助力をいただいた。文末ではあるが、ここに記して深い感謝の意を表すこととしたい。

註

一　古川登・村上雅紀二〇〇四「越前地方における石造多層塔の研究」『清水町埋蔵文化財発掘調査

報告書Ⅷ・片山鳥越墳墓群・方山真光寺跡塔址』清水町教育委員会

二　古川登二〇〇八「中世石造塔、その広域編年の可能性について」『島根考古学会誌』二五号　島根考古学会

三　森　郁夫一九八六「瓦」『考古学ライブラリー』四三　ニューサイエンス社、上原真人一九九六「蓮華紋」『日本の美術』№三五九　至文堂

四　上田三平一九三三「主要金石年表」『越前及若狭地方の史蹟』三秀舎

五　三井紀生二〇〇二「八幡神社多層塔の塔身」『越前笏谷』福井新聞社六九―七〇頃

六　古川登二〇〇五「引接寺石造多層塔について」『武生立葵会報』第三三号　武生立葵会

七　三井紀生二〇〇二「白山神社の石龕と九重塔」『越前笏谷』福井新聞社八三―八四頃

八　加藤茂森編『永平寺町文化財調査報告書第2集・志比線刻磨崖仏調査報告書』永平寺町教育委員会

九　古川登・村上雅紀二〇〇五「福井県丹生郡越前町仏性寺の石造多宝塔について」『日引』第6号　石造物研究会

参考文献

古川登二〇〇八「越前地方における中世石造塔と浄土教」菅谷文則編『王権と武器と信仰』　同成社

増永常雄一九七二『松岡町の石造美術』　松岡町教育委員会

京田良志二〇〇〇「蓮弁周縁月輪の起原について」『富山市日本海文化研究所所報』第二四号富山市日本海文化研究所

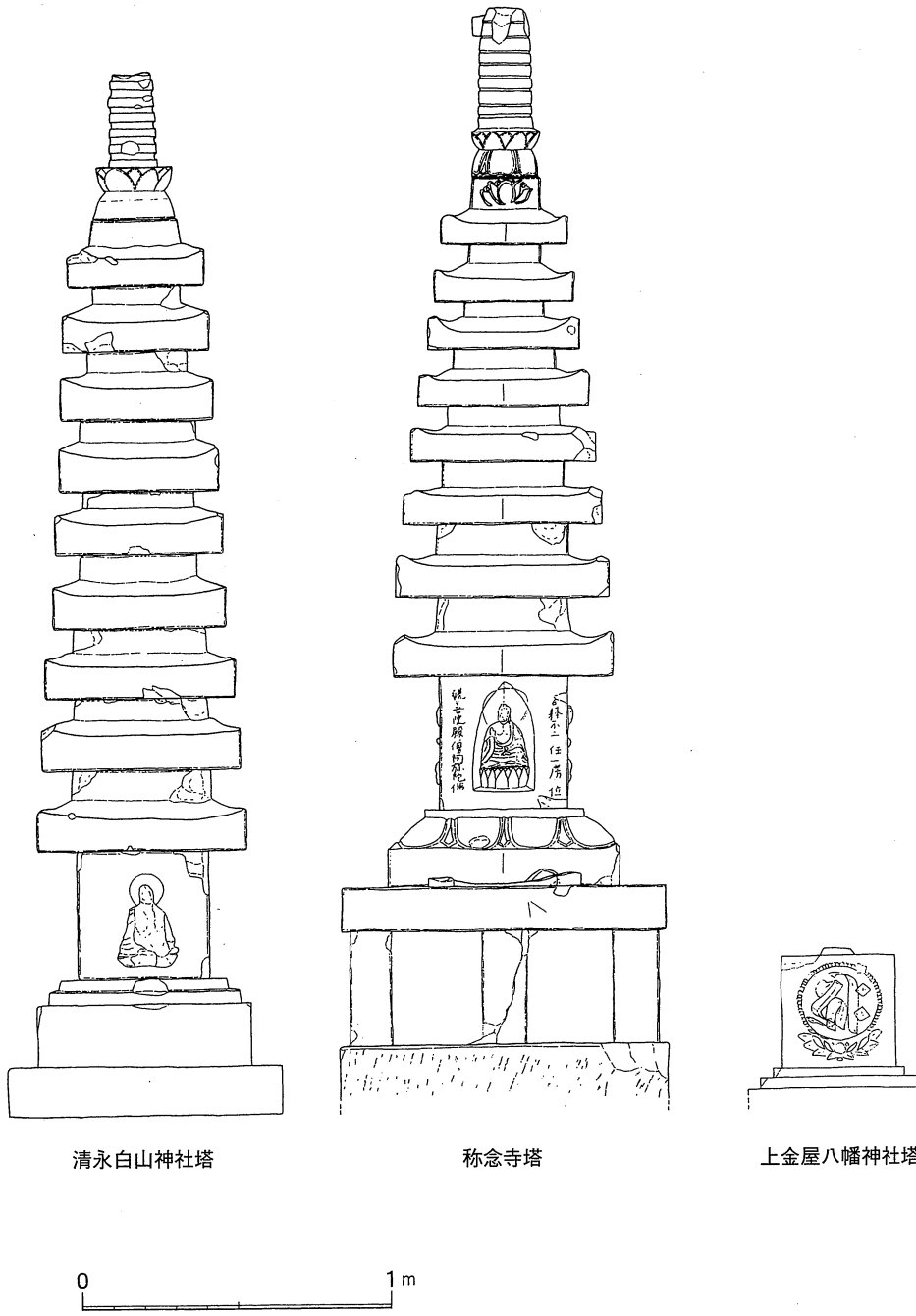
古川　登二〇〇六「石造物研究の現在・越前地方における中世石造塔研究の現状を中心に」『日引』第8号　石造物研究会

望月友善編二〇〇四「増補版種子抄」『歴史考古学研究』第五三号　歴史考古学研究会

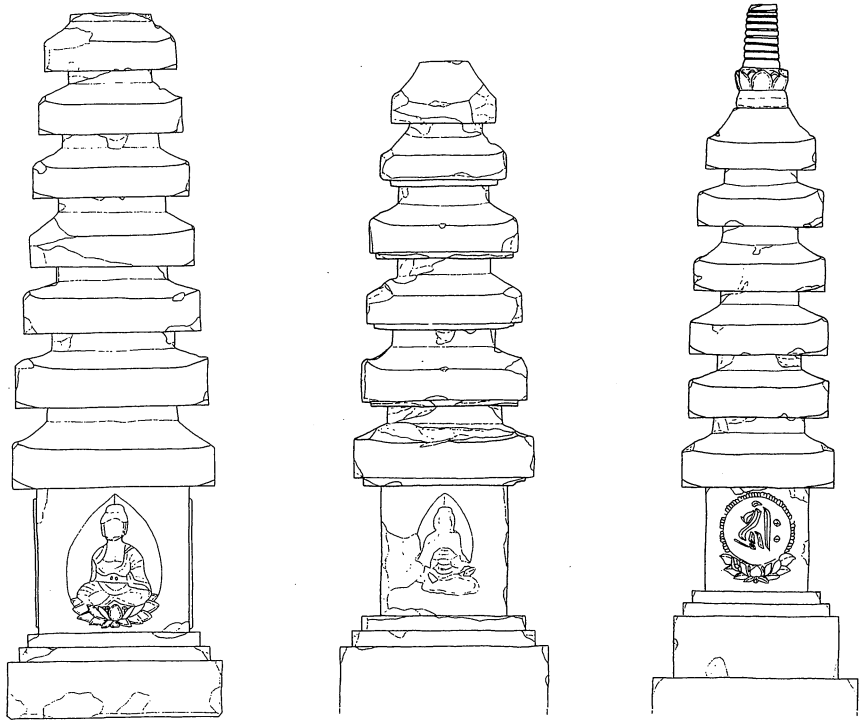
川勝政太郎一九八〇『梵字講話』　河原書店

児玉義隆一九九一『梵字必携』　朱鷺書房

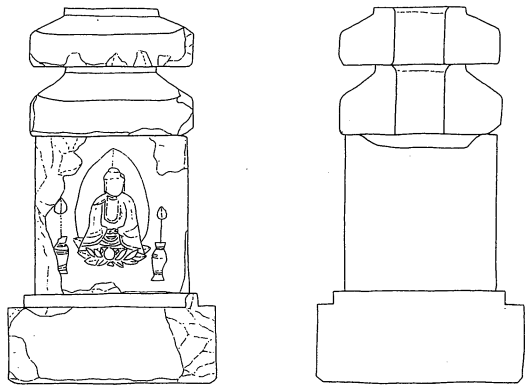
三井紀生一九九九「越前石製石造多層塔塔身の変遷について」『北陸石仏の会研究紀要』第三号　北陸石仏の会



坂井市の石造多層塔実測図 1



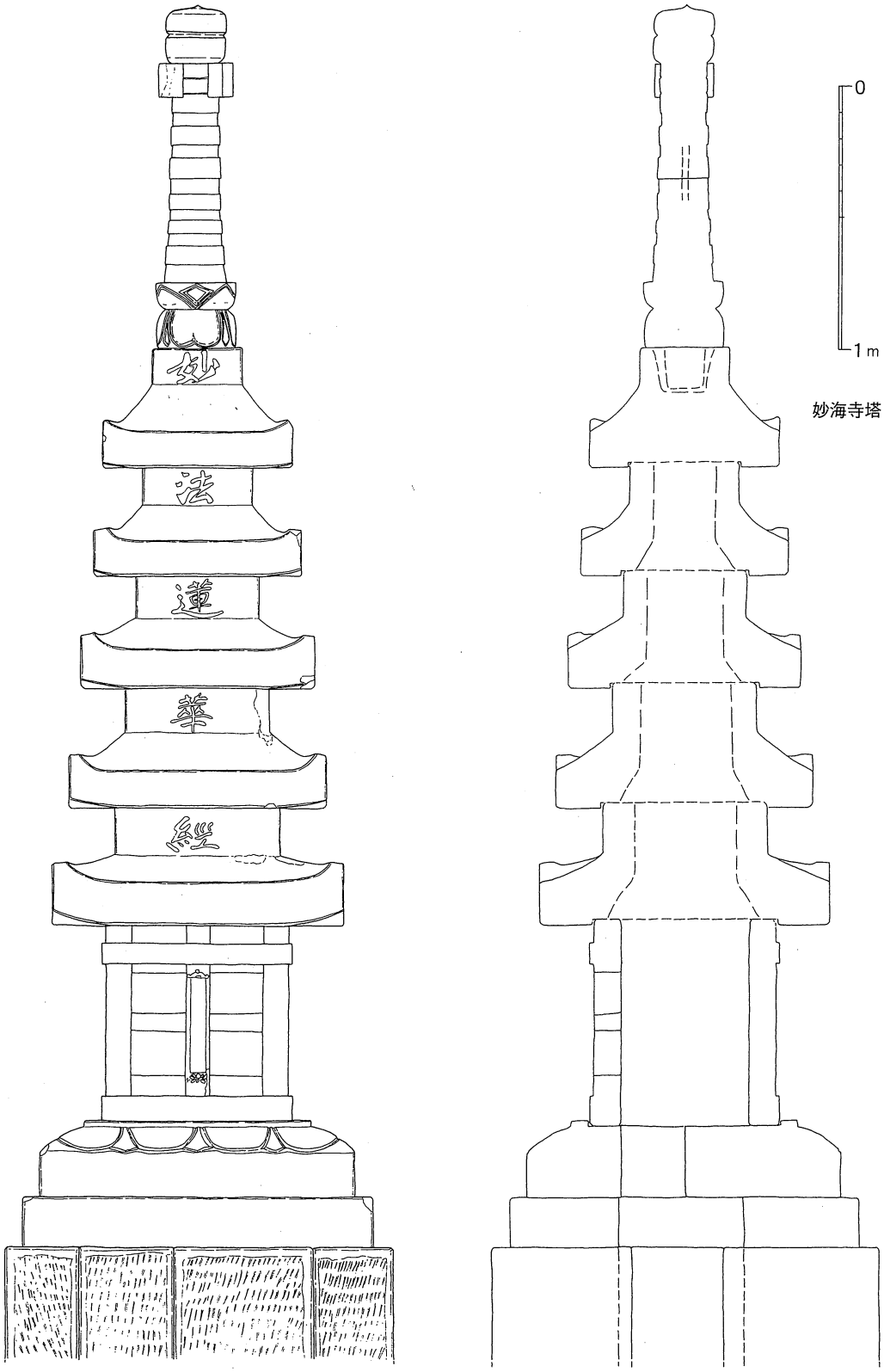
慶法寺塔　　針原八幡神社塔　　信社王神社塔



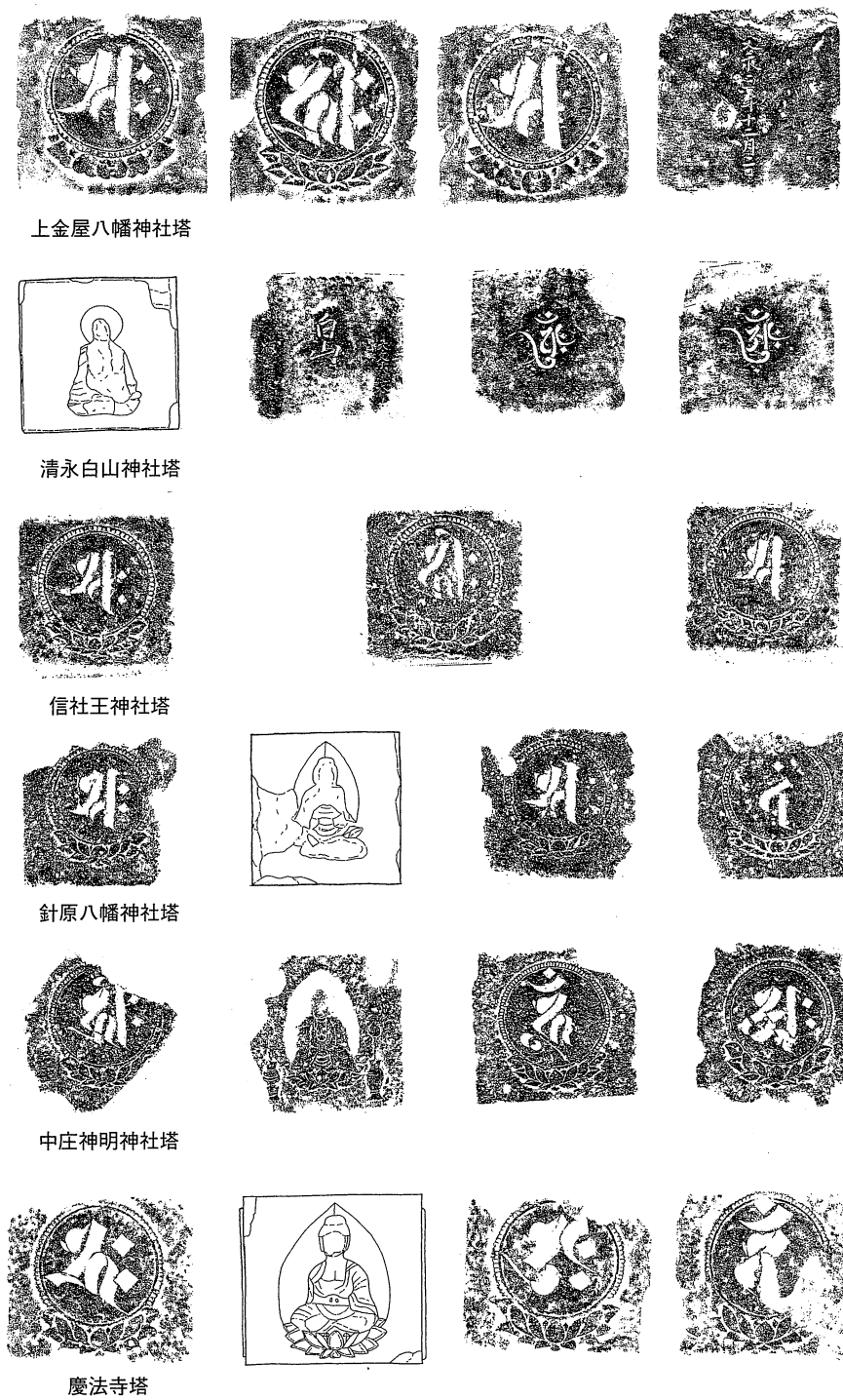
中庄神明神社塔

0　1m

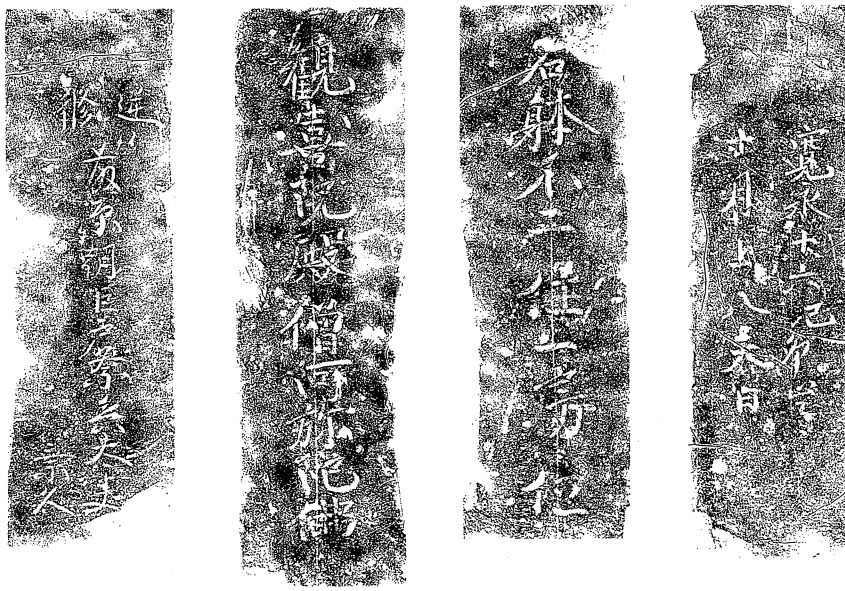
坂井市の石造多層塔実測図２



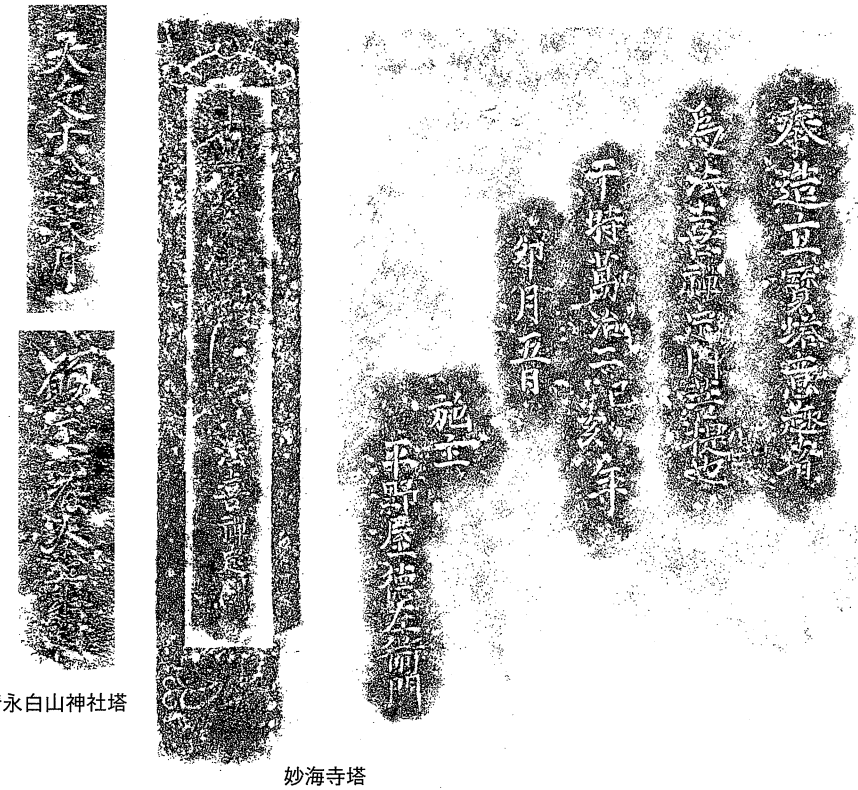
坂井市の石造多層塔実測図 3



坂井市の石造多層塔・塔身装飾（縮尺不同）



称念寺塔



清永白山神社塔

妙海寺塔

坂井市の石造多層塔紀年銘・銘文拓影（縮尺不同）